

ジェイムス夫人訳 *The Cub's Triumph* と グリフィス訳 “The fox and the badger”

—— 狐・猫・狸が化ける国「日本」 ——

大塚 奈奈 絵

1. はじめに

本稿では、前稿⁽¹⁾に引き続き、長谷川武次郎（1853-1936）が出版した『日本昔噺シリーズ』の中から、ジェイムス夫人（Mrs. T. H. (Kate) James, 1845-1928）が翻訳したちりめん本の翻訳の原典となった可能性のある作品を紹介する。また、*The Cub's Triumph*（『野干ノ手柄』）を取り上げ、原典と思われる作品の本文と比較することにより、ジェイムス夫人の翻案の特徴を考察する。

2. 原典を求めて

前稿でも述べたように、ジェイムス夫人は日本語の会話は巧みだったが、日本語の原典を読むことはできなかったと考えられ、外国語に訳された日本の昔話などを原典としたのではないかとされている⁽²⁾。日本には、多くの昔話やお伽噺の伝承があり、室町時代の『御伽草子』をはじめとする絵巻や絵本の物語集に加えて、江戸時代には、『桃太郎昔話』や『さるかに合戦』などが子ども向けの挿絵本である「赤本」と呼ばれる形態で出版された。

明治になると、来日した各国の外交官や明治政府の「お雇い外国人」などにより、日本のお伽噺や昔話が翻訳・紹介された。日本語は読めなかったが、数カ国語に堪能で、読書家であったと言われるジェイムス夫人は、欧文に翻訳された日本の昔話等を収録した図書を原典とした可能性が考えられる。長谷川武次郎による「日本昔噺シリーズ」が刊行され始めた1885（明治18）年以前に出版され、ジェイムス夫人の作品の原典となった可能性のある日本の昔話やお伽噺の主な翻訳書は、年代順に以下の5点があると考えられる。

(1) Mitford, A. B.. *Tales of Old Japan, Illustrations, Drawn and Cut on Wood by Japanese Artists*. Macmillan, 1871.

ミットフォード（Algernon Bertram Freeman-Mitford, Lord Redesdale（1837-1916））は、1866-70年に外交官として来日した。本書には、『忠臣蔵』の翻案である“The Forty-Seven rōnins”などの他、Fairy Talesとして、“The Tongue-cut Sparrow”（舌切り雀）など計9編が収録されている。このうち、ジェイムス夫人の翻訳作品との重複は、“The Accomplished and Lucky Tea-kettle”（分福茶釜）のみである。

(2) Griffis, William Elliot. *Japanese Fairy World. Stories from the Wonder-love of Japan*. J. H. Barhyte, 1880.

アメリカ人のグリフィス (William Elliot Griffis (1843-1928)) は、1970 年 12 月に来日して福井の藩校の化学教師となり、1872 年には東京の大学南校 (東京大学の前身) で教鞭を取った。1874 年に帰国後、神学校に入学して牧師となり、1926-27 年に日本を再訪した。日本に関する著書が多く、1876 年に出版した *The Mikado's Empire* (日本語訳『皇国』) が名高い。*Japanese Fairy World* には、ジェイムス夫人の作品に対応する昔話が 5 件掲載されている。ダニエーレ・レスタは、ジェイムス夫人の *The Ogres of Oyeyama* が、本書に収録された "Raiko and the Shi-ten Doji" と同様の内容であることを指摘している⁽³⁾。

(3) Tr. by Basil Hall Chamberlain. *Ko-ji-ki; or, "Records of ancient matters"*. B. Meiklejohn (Transactions of the Asiatic Society of Japan Supplement to vol. X) [1882]

チェンバレン (Basil Hall Chamberlain (1850-1935)) は、英国の名門に生まれ、1873 (明治 6) 年に来日し、翌年、海軍兵学校の教師となった。日本の詩歌や文法を研究し、1886 (明治 19) 年からは東京帝国大学で日本語学や言語学を講義した。多くの研究書の他に、『浦島』をはじめとするちりめん本「日本昔噺シリーズ」4 編やアイヌのお伽噺シリーズなどの著作があり、海軍兵学校の同僚であった T. H. ジェームスの夫人ケイトを長谷川武次郎に紹介したとされる。*Ko-ji-ki or Records of ancient matters* は、1882 年に『日本アジア協会誌』の 10 巻の別冊として刊行され、翌年に横浜の Lane Crawford から単行書として刊行された。ジェイムス夫人の作品のうち、no. 11 *The Hare of Inaba* と no. 14 *The Princes Fire-Flash and Fire-Fade* は *Ko-ji-ki* からの採話である。

(4) Junker von Langeegg, F. A. *Japanische Thee-geschichten: Fu-sô chô-wa. Volks- und geschichtliche Sagen, Legenden und Märchen der Japanen*. C. Gerold's Sohn, 1884.

ヨンケル (Junker von Langeegg, F. A. (1828-19?)) は、1828 年ウィーン生まれ。ウィーン大学で、法学、医学を学ぶ。内科学博士号、産科学修士号、眼科学修士号、外科学博士号を受領。渡英後、軍医として従軍。1872-75 年に来日し、京都療病院にて教鞭を取った。上記の他に *Midzuho-gusa: segenbringende Reisähren: Nationalroman und Schilderungen aus Japan*. Breitkopf und Härtel, 1880 3 vol. がある。

Fu-sô chô-wa については、奥沢康正による翻訳『外国人のみたお伽ばなし——今日のお雇い医師ヨンケルの『扶桑茶話』』思文閣出版 1993 があり、『扶桑茶話』31 話の翻訳の他、ヨンケルの履歴や業績が収録されている。『扶桑茶話』には、ジェイムス夫人の作品に対応する昔話が 2 話収録されている。

(5) David Brauns. *Japanische märchen und sagen, gesammelt und hrsg.* Leipzig, W. Friedrich, 1885.

ブラウنز (David August Brauns (1827-93)) は、北ドイツのブラウンシュヴァイク公国出身。医学博士、地質学博士。1874 年からハレ大学で地質学・土壌学の講師を勤め、1879 年にお雇い教師として、東京大学理学部地質学教室教授に招聘される。日本の新生代における貝化石研究の先駆者で 1881 年離日。学術論文など多数の著作があり、アイヌ文化の論文もある。ブラウنزの妻は作家の Caroline Wilhelmine Emma Brauns (1836-1905) で、帰国後、日本のお伽話を出版している。

上記の図書では、お伽話 (22 話)、寓話 (6 話)、神々の伝説 (17 話)、サーガ・英雄の伝説 (20 話)、歴史的な伝説 (11 話)、伝説 (21 話)、地方の伝説 (69 話)、計 166 話を収録している。ジェイムス夫人の作品に対応するものは 3 編である。このうち "Schippeitaro" (竹箆太郎) については、アン・ヘリングがブラウنزからの翻訳の可能性があると指摘している⁽⁴⁾。

表 1 は、これらの著作とジェイムス夫人による「日本昔噺シリーズ」の No. 1~20 までの作品の対応をまとめたものである。ジェイムス夫人による作品のほぼ全てについて、英語あるいはドイツ語の先行

表1：ジェイムス夫人の作品の原典の可能性のある図書

(1) <i>Tales of old Japan, illustrations, drawn and cut on wood by Japanese artists.</i>	(2) <i>Japanese fairy world. Stories from the wonder-lore of Japan.</i>	(3) <i>Ko-ji-ki or Records of ancient matters.</i>	(4) <i>Japanische Thee-geschichten: Fu-sô chô-wa. Volks- und geschichtliche Sagen, Legenden und Märchen der Japanen.</i> (奥沢康正訳『扶桑茶話』)	(5) <i>Japanische märchen und sagen, gesammelt und hrsg.</i>
日本昔噺シリーズ No. タイトル [日本語タイトル] 初版の出版年				
no. 10 <i>The Matsuyama Mirror</i> [松山鏡] 1886			19 話「越後の少女」	
no. 11 <i>The Hare of Inaba</i> [因幡の白兎] 1886		White Hare of Inaba		
no. 12 <i>The Cub's Triumph</i> [野干の手柄] 1886	The fox and the badger		29 話「キツネとタヌキ」	Der bestrafte Verrath des Tanuti
no. 14 <i>The Princes Fire-Flash and Fire-Fade</i> [玉の井] 1887		The August Exchange of Luck The Palace of the Ocean-Processor Submission of his Augustness Fire-Shine		
no. 16 <i>The Wooden Bowl</i> [鉢かづき] 1887				Das Mädchen mit dem Holznapfe
no. 16 <i>The Wonderful Tea-Kettle</i> [文福茶釜] 1896	The Accomplished and Lucky Tea-kettle			
no. 17 <i>Schippeitaro</i> [竹匁太郎] 1888				Schippeitaro
no. 18 <i>The Ogre's Arm</i> [羅生門] 1889	Watanabe cuts off the oni's arm			
no. 19 <i>The Ogres of Oyeyama</i> [大江山] 1891	Raiko and the Shi-ten Doji			
no. 20 <i>The Enchanted Waterfall</i> [養老の滝] 1892	The Waterfall of Yoro, or the fountain of Youth			

する翻訳作品があることが分かる。

なお、古事記の翻訳をはじめとして、これらの図書は日本文化研究の研究書や一般向の日本文化紹介の図書であって、児童向けの書籍ではない。ジェームス夫人や他の翻訳者が *Japanese Fairy Tales Series* のために採話をした際には、原文に文化的な背景が異なる児童も理解しやすいような翻案や工夫を加えたことは想像に難くない。

3. 狐、猫、狸が化ける国「日本」

表1に挙げた著作の緒言などからは、来日したお雇い外国人と呼ばれる知識人達の、日本のお伽話への民俗学的興味がうかがわれて興味深い。特に、日本の文学・文化に深い知識を持つチェンバレンは、キリスト教的な世界のお伽噺と日本のお伽話との違いについて、日本百科ともいえる著作 *Things Japanese* (『日本事物誌』) の中で、以下のように述べている。

…これらの物語をフェアリー・テールズ（妖精物語）と呼ぶのは便利ではあるが、正しい意味のフェアリー（妖精）は物語の中に出て来ない。妖精の代わりに出てくるのは、鬼（ゴブリン）であり、悪魔（デビル）である。これとともに、狐、猫、狸が悪事を働く超自然力の持ち主として登場する。このお伽話の世界は、「シンデレラ姫」や「深靴をはいた猫」などを持つヨーロッパのお伽噺の世界とはまったく異質のものであり、さらに、豪華で複雑怪奇なアラビアン・ナイトのすばらしい世界ともまったく別の世界である⁽⁵⁾。

チェンバレンが、日本のお伽話の特徴の一つとしてあげた「狐、猫、狸が悪事を働く超自然力の持ち主として登場する」ことについては、ジェームス夫人の長女であり、児童文学者となったグレイス・ジェームス (James, Grace, 1882-1965) も、1933年の講演録 “Japanese Fairy Tales and Folklore” の中で、チェンバレンの前述の説明を紹介して賛意を示した上で、ミッドフォードの「分福茶釜」の翻訳を紹介し、さらに以下のように述べている。

Lafcadio Hearn, in particular, was fascinated by the fairy fox myth and tells several fox stories, comic, eerie or pathetic. One of them, surely the most touching animal story in the world, tells of parent foxes, who in gratitude to a mortal, sacrifice the life of their darling and only cub. My mother also tells a good fox story for children. It is called “The Cub’s Triumph.”⁽⁶⁾

我々日本人にとっては、狐や狸、時には猫などが「化ける」ことは一向に不思議ではないが、チェンバレンやグレイス・ジェームスが指摘するように、キリスト教圏の国々のお伽噺の中では、擬人化された狐や狸が登場することはあっても、狐や狸、猫が「化ける」能力を持ち、悪事を働くようなお伽噺、あるいは恩人に報いるようなお伽噺は例がない。なお、グレイス・ジェームスは、後にその著作 “The Little Cub”⁽⁷⁾ の中で、狐や狸が化けることについて、ジェームス夫人をモデルにしたという Granny と孫の間で取り交わされる以下のような問答を描いている。

“What about changing themselves into men?” asked Mary. “Can foxes and badgers really do that?”
Granny hesitated. “I hardly think they do it now, not in this country at any rate.”

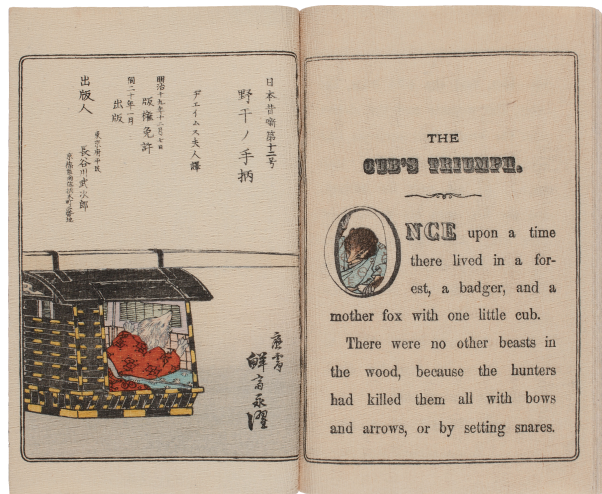
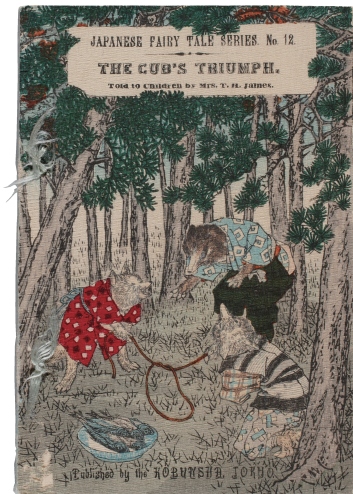
“The Little Cub” の中で Granny が孫達に語る日本のお伽話は、ジェームス夫人による「日本昔噺シリ

ーズ」no. 12 *The Cub's Triumph* の翻案である。「狐や狸が人間に本当に化けるの？」という少女の質問は、日本の昔話を聞いた時の西欧の子ども達の素直な反応だと考えられる。

4. *The Cub's Triumph*

本稿では、「狐、猫、狸が悪事を働く超自然力の持ち主として登場する」お伽噺として、「日本昔噺シリーズ」no. 12 *The Cub's Triumph* (日本語タイトル『野干ノ手柄』)を取り上げ、原典との比較により、ジェイムス夫人の翻案の特徴を考察する。

The Cub's Triumph (日本語タイトル『野干ノ手柄』)は、長谷川武次郎の弘文社から「日本昔噺シリーズ」のno. 12として、1887(明治20)年に出版された。13丁、挿絵は、小林永濯によるもので、ちりめん紙を使用した15.2×10.4のちりめん本とやや大型の平紙本があり、平紙本の表紙裏の奥付ページは、大名がのる駕籠の扉を開けると子狐が覗く、いわゆる「仕掛け本」となっている。



「神奈川大学図書館所蔵資料」

The Cub's Triumph の筋立ては、母狐が狸の計略で殺される前半と狸との化け競べによる子狐の仇討ちからなっている。

前半：森の動物仲間を猟師に殺され、生き残った狐の親子と狸は食べる物もなくなった。狸の提案で、狐が樵に化け、死んだふりをした狸を町に売りに行き、その金で食べ物を買う。次に狸が樵に化け、狐を売りに行くが、狸の計略によって母狐は人間に殺され、狸はその代金で買った食べ物を独り占めにしてしまう。

後半：敵討ち悲しんだ子狐は、狸に化け競べを持ちかける。子狐が大名行列に化けたと思い込んだ狸は、大名行列に走り込み、侍に斬り殺されてしまう。

5. 話や伝承にみる「化けくらべ」と *The Cub's Triumph*

この話を、石澤小枝子は、「これはよくある狐と狸の化かし合いの話であるが、ジェイムス夫人はやや深刻な仇討ち話にしている。」(石澤小枝子 p. 39) と述べ、ヘリングも同様に、以下のようにと述べ

ている。

「きつねのてがら」という題目に見覚えがなくても、「化けくらべ」と言ったら、戦後の絵本の古典に明るい人なら、狐と狸の競争を描いた松谷みよ子氏の代表的な作品を思い起こすはずである。(中略)福音館版の『ばけくらべ』には多少の滑稽味があるのに対して、ジェイムス夫人と小林永濯が担当した『野干の手柄』の方は、真剣そのものの仇討ちの形で、物語が展開していく。」⁽⁸⁾

児童文学の専門家である石澤やヘリングが *The Cub's Triumph* と比較している大名行列が登場する「化けくらべ」には、日本各地に伝わる民話があり、松谷みよ子をはじめ、多くの作家が採話し、作品として刊行している。例えば、松谷みよ子の「化けくらべ」では、ごんべえ狸と、へらこい狐が競い合い、大名行列のお侍にさんざんなめにあわされたへらこい狐は「ぐえんこ、ぐえんこ泣きながら」山へ逃げ帰る。つまり、狐と狸の化かし合いといっても、*The Cub's Triumph* とは異なり、ひどい目にあうのは狐である。その他、子ども向けの絵本や地方の伝説でも狐がひどいめにあうものが多く、例えば、高知の柴右衛門狸と狐の化け比べでは、狐が「家来に無礼打ちにされた為、四国には狐がいない。」とされている。

また、狸がひどい目にあうものには、泉南市樟井「黒衛門」狸の話などがあるが、狸が勝つ話に比べてやや数は少なく、また、狐と狐の化け比べ、狸と狸の化け比べの話もある。ただし、*The Cub's Triumph* の前半、母狐が狸の計略で殺される話や、化けくらべ＝仇討ちという筋立ては、現代の児童書や民話の中には、管見の限りでは見当たらなかった。

一方、先に挙げたグリフィス、ヨンケル、ブラウنزの民話にある狐と狸の話は、どれも *The Cub's Triumph* と似た筋立てである。

・グリフィス訳 “The fox and the badger” のあらすじ

前半：四国の山岳地帯では、腕のよい猟師が罠で狐や狸を狩ったため、一匹の年寄りの灰色狸と、母狐と子狐が生き残っているだけであった。3匹は罠が怖いので、食べ物を取ることもできずに飢えていたため、狸の提案で人間に化けた狐が死んだふりをした狸を里に売りに行くことにした。狐は豆腐と鶏肉をたくさん買って帰り、狸は逃げ出した。翌週は狸が人間に化け、狐を売りに出かけたが、貪欲な狸は人間に狐を殺させ、ご馳走を独り占めにした。

後半：子狐は、復讐を決意し、狸に化け比べを持ちかけた。子狐が大名行列に化けたと思い込んだ狸は大名行列に走り込み、侍達に殴り殺された。

・ヨンケルの『扶桑茶話』「29話 キツネとタヌキ」

前半、後半とも『野干の手柄』とあらすじは同一。場所も四国。狸は最後に手打ちにあう。グリフィス訳に比べると、全体に描写が細かい。ただし、母狐の子狐に対する心遣いなどの描写はない。むしろ、子狐の立場で、母狐の言いつけについて、逸話を交えて心情が述べられている。

・ブラウنز *Der Bestrafte Verrath des Tanuki* (「タヌキの罰せられた裏切り」)

前半、後半とも『野干の手柄』とあらすじは同一だが、ヨンケルよりもやや単純な描写となっている。狸は最後に殴り殺され、母狐の子狐に対する気持ちなどの描写はない。

これらを勘案すると、子狐による「真剣そのものの仇討ち」は、ジェイムス夫人による創作ではなく、むしろ、先行の翻訳作品の内容をそのまま採用したものと考えられる。3つの作品の中で、出版年が最も古く、内容的に最も類似点が多いのが、グリフィス訳 “The fox and the badger” である。この2

つの作品の翻訳の対比表（表2）を作成し、その共通点と相違点を表3にまとめた。

表2: *The Cub's Triumph* · The Fox and The Badger 対比表

<i>The Cub's Triumph</i>	The Fox and The Badger
Once upon a time there lived in a forest, a badger, and a mother fox with one little cub. There were no other bests in the wood, because the hunters had killed them all with bows and arrows, or by setting snares.	There is a certain mountainous district in Shikoku in which a skillful hunter had trapped or shot so many foxes and badgers that only a few were left.
The deer, and the wild boar, the hares, the weasels and the stoats even the bright little squirrels had been shot, or had fallen into traps. At last, only the badger, and the fox, with her young one were left. And they were starving, for they dared not venture form their holes for fear of the traps. They did not do, or where to turn for food.	These were an old grey badger and a female fox with one cub. Though hard pressed by hunger, neither dared to touch a loose piece of food, lest a trap might be hidden under it. Indeed they scarcely stirred out of their holes except at night, lest the hunter's arrow should strike them.
At last the badger said, "I have thought of a plan. I will pretend to be dead. You must change yourself into a man and take me into the town, and sell me. With the money you get for me, you must buy food, and bring it into the forest. When I get a chance, I will run away, and come back to you, and we will eat our dinner together. Mind you wait for me, and don't eat any of it until I come. Next week it will be your turn to be dead, and my turn to sell, do you see!"	At last the two animals held a council together to decide what to do, whether to emigrate or to attempt to outwit their enemy. They thought a long while, when finally the badger having hit upon a good plan, cried out: "I hve it. Do you transform yourself into a man. I'll pretend to be dead. Then you bind me up and sell me in the town. With the money paid you can buy some food. Then I'll get loose and come back. The Next week I'll sell you and you can escape."
The fox thought this plan would do very well: so, as soon as the badger had lain down, and pretended to be dead, she said to her little cub, "Be sure not to come out of the hole until I come back. Be very good and quiet, and I will soon bring you some nice dinner."	"Ha! ha! ha! yoroshuu, yoroshuu," (good, good,) cried both together. "It's a capital plan," said Mrs. Fox. So the Fox changed herself into a human form, and the badger, pretending to be dead, was tied up with straw popes.
She then changed herself into a woodcutter, took the badger by the heels, and swung him over her shoulders, and trudged off into the town. There she sold the badger for a fair price, and with the money bought some fish, some tofu* and some vegetables. She then ran back to the forest as fast as she could, changed herself into a fox again, and crept into her hole to see if little cub was all right. Little cub was there, safe enough, but very hungry, and wanted to begin upon the tofu at once.	Slinging him over her shoulder, the fox went to town, sold the badger, and buying a lot of tofu (bean-cheese) and one or two chickens, made a feast. By this time the badger had got loose, for the man to whom he was sold, thinking him dead, had not watched him carefully. So scampering away to the mountains he met the fox, who congratulated him, while both feasted merrily.
* Curd made from white beans.	
"No, no," said the mother fox. "Fair play's a jewel. We must wait for the badger"	

Soon the badger arrived, quite out of breath with running so fast. "I hope you haven't been eating any of the dinner," he panted."	
"I could not get away sooner. The man you sold me to, brought his wife to look at me, and boasted how cheap he had bought me. You should have aske twice as much. At last they left me alone, and then I Jumped up, and ran away as fast as I could."	
The badger, the fox and the cub now sat down to dinner, and had a fine feast, the badger taking care to get the best bits for himself. Some days after, when all the food was finished, and they had begun to hungry again, the badger said to the fox;	
"Now 'tis your turn to die." So the fox pretented to be dead, and the badger changed himself into a hunter, shouldered the fox, nd went off to the town, where he made a good bargain, and sold her for a nice little sum of money.	The next week the badger took human form, and going to town sold the fox, who made believe to be dead.
You have seen already that the badger was greedy and selfish. What do you think he did now! He wished to have all the money, and all the food it would buy for himself, so, he whispered to the man who had bought the fox. "That fox is only pretending to be dead; take care he doesn't run away."	But the badger being an old skin-flint, and very greedy, wanted all the money and food for himself. So he whispered in the man's ear to watch the fox well as she was only feigning to be dead.
"We'll soon settle that," said the man: and he knocked the fox on the head with a big stick, and killed her.	So the man taking up a club gave the fox a blow on the head, whichi finished her.
The badger next laid out the money in buying all the nice things he could think of. He carried them off to the forest, and there eat them all up himself, without giving one bit to the poor little cub, who was all alone, crying for its mother, very sad, and very hungry.	The badger, buying a good dinner, ate it all himself, and licked his chops, never even thinking of the fox's cub.
Poor little motherless cub! But being a clever little fox, he soon began to put two and two together, and at last felt quite sure that the badger had, in some way, caused the loss of his mother.	The cub after waiting a long time for its mother to come back, suspected foul play, and resolved on revenge.
He made up his mind that he would punish the badger; and as he was not big enough, or strong enough, to do it by force, he was obliged to try another plan.	
He did not let the badger see how angry he was with him, but said in a friendly way. "Let us have a game of changing ourselves into men.	So going to the badger he challenged him to a trial of skill in the art of transformation. The badger accepted right off, for he despised the cub and wished to be

If you can change yourself so cleverly that I cannot find you out, you will have won the game; but, if I change myself so that you cannot find you out, you will have won the game; but, if I change myself so that you cannot find me out, then I shall have won the game. I will begin, if you like; and, you may be sure, I shall turn myself into somebody very grand while I am about it."	rid of him. "Well what do you want to do first? Said Sir Badger." "I propose that you go and stand on the Big Bridge leading to the city ," said the cub, "and wait for my appearance. I shall come in splendid garments, and with many followers in my train. If you recognize me, you win, and I lose. If you fail, I win."
The badger agreed. So then, Instead of changing himself at all, the cunning little cub just went and hid himself behind a tree, and watched to see what would happen.	So the badger went and waited behind a tree.
Presently, there came along the bridge, leading into the town , a <i>daimio</i> , seated in a <i>norimono</i> , a great crowd of servants and men at arms following him.	Soon a daimio riding in a palanquin, with a splendid retinue of countiers appeared, coming up the road.
The badger was quite sure that this must be the fox; so, he ran up to the <i>norimono</i> , put in his head, and cried. "I've found you out! I've won the game!" "A badger! A danger! Off with his head," cried the <i>daimio</i> .	Thinking this was the fox-cub changed into an nobleman, although wondering at the skill of the young fox, the badger went up to the palanquin and told the person inside that he was recognized and lost the game.
So one of the retainers cut off the badger's head with one blow of his sharp sword. The little cub, all the time laughing unseen behind the tree.	"What!" said the daimio's followers, who were real men, and surrounding the badger, they beat him to death. The fox-cub, who was looking on from a hill near by, laughed in derision, and glad that treachery was punished, scampered away.

表3: *The Cub's Triumph* と "The fox and the badger" の共通点と相違点

	<i>The Cub's Triumph</i>	<i>The fox and the badger</i>
場所	森	四国の山岳地帯
登場人物?	狸, 母狐, 子狐	狸, 母狐, 子狐
死ぬふりをして食料を入手 (1回目)	狸が提案。最初は狸が死ぬふり, 狐が人間に化ける	狸が提案。最初は狸が死ぬふり, 狐が人間に化ける
	母狐は子狐への言い聞かせる	
買った食料	豆腐と鶏 (「豆腐」に注)	魚, 豆腐, 野菜 (「豆腐」に注)
	母狐は子狐を心配したり, たしなめる	
死ぬふりをして食料を入手 (2回目)	狐が死んだふりをするが, 狸が裏切り, 狐は人間に殺される	狐が死んだふりをするが, 狸が裏切り, 狐は人間に殺される
母を亡くした子狐への配慮	なし	なし
場所	along the bridge, leading into the town	the Big Bridge leading to the city
大名行列	<i>daimio</i> , seated in a <i>norimono</i> ,	<i>daimio</i> riding in a palanquin
狸の最期	侍に首を切られる	大名の家来に殴り殺される

二つの作品は、あらすじは同一で、注やローマ字表記も似通っているが、ジェイムス夫人の翻案では、“Be very good and quiet, and I will...”や“Fair play’s a jewel.”などの子狐に対する母狐の言い聞かせ（しつけ）と“to see if little cub was all right”などの心配などが加筆され、母と子の繋がりがより強調されている。この翻案によって、後半の狸に対する子狐の仇討ちが、子どもたちにも納得できる内容になっていることが分かる。

5. まとめ

難しい日本語を読むことはできなかったと推察されるジェイムス夫人による「日本昔話シリーズ」の各編については、年代的に、原典となった可能性のある日本のお伽話や民話などの翻訳書を、表1に挙げたように計5点を確認することができる。これらには、それぞれにジェイムス夫人の作品に対応する内容の話が掲載されている。

また、「日本昔話シリーズ」の4編を翻訳しているチェンバレンは、日本のお伽噺の特徴として、「狐、猫、狸が悪事を働く超自然力の持ち主として登場する」ことを指摘している。

The Cub's Triumph の内容は、母狐が狸の計略で殺される前半と化け競べを利用した子狐の仇討ちの後半に分けることができるが、現在の日本の民話や伝承ではこの物語の後半のみが「化けばなし」として伝わっている。また、負けた方が殺されるような残酷な結末は、民話や絵本などでは見られない。ただし、ジェイムス夫人訳に先行する、英訳・ドイツ語訳の子狐の仇討ちの話では、前半・後半とも類似した筋立てを3編を確認することができた。1880年代前半までの3つの翻訳作品と比較すると、ジェイムス夫人の翻訳では、母狐と子狐の繋がりが、「正しい行いをするのが大切なのですよ」という母狐の言い聞かせを強調することによって、狐や狸が人間に化けるという特異性や物語の後半の子狐の仇討ちが、西欧の読者にも受け入れやすい作品へと変化していると考えられる。

〈参考文献〉

- アン・ヘリング「国際出版の曙——明治の欧文草双紙」福生市郷土資料室編『特別企画展 ちりめん本と草双紙』福生市教育委員会。
- 石澤小枝子『ちりめん本のすべて：明治の欧文挿絵本』三弥井書店 2004。
- 奥沢康正『外国人のみたお伽ばなし——今日のお雇い医師ヨンケルの『扶桑茶話』』思文閣出版 1993 p. vi, 338, 24。
- 久保裕愛「伊予・喜左衛門狸伝説における口承／書承の問題・再考」『言語文化研究』38（1-2）2018.9 pp. 343-396。
- 「化けくらべ」松谷みよ子『読んであげたいおはなし（下）——松谷みよ子の民話』筑摩書房 2011 pp. 176-180。
- 小暮正夫文・原ゆたか絵「ばけはけくらべ」『キツネとタヌキのばけはけ話』（日本のおばけ話・わらい話 13）岩崎書店 1987 pp. 45-52。
- 城陽市教育委員会「昔話3 狸と狐のだましあい」『城陽の民話と暮らし』1993 p. 4-5。
- 「12 THE CUB'S TRIUMPH 野干の手柄 子狐の勝利」宮尾與男編『対訳日本昔噺集：明治期の彩色縮緬絵本 第2巻』彩流社、2009 pp. 113-138。
- Brauns, David August. *Japanische märchen und sagen, gesammelt und hrsg.* Leipzig, W. Friedrich, 1885. p. 439.
- Tr. by Chamberlain, Basil Hall. *Ko-ji-ki; or, "Records of ancient matters"*. B. Meikle john (Transactions of the Asiatic Society of Japan Supplement to vol. X) [1882]. (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1677745>) (2022-11-13 参照)
- Griffis, William Elliot. "The Fox And The Badger." *Japanese fairy world. Stories from the wonder-lore of Japan*. J. H. Barhyte, 1880 Preprint. pp. 32-33.
- James, Grace. "The Little Cub." *John and Mary's Japanese Fairy Tales*. London: Frederick Muller, 1957. pp. 83-104.
- Mitford, A. B.. *Tales of old Japan, illustrations, drawn and cut on wood by Japanese artists*. Macmillan, 1871.

注

- (1) 大塚奈奈絵「ジェイムス夫人とちりめん本 The Flowers of Remembrance and Forgetfulness : 『今昔物語集』「兄弟二人殖萱草紫苑語」の翻案」神奈川大学人文学研究所報 (68) 2022-09 p. 85-95。
- (2) Koyama, Noboru. "Grace James (1882-1965) and Mrs T.H. (Kate) James (1845-1928): Writers of Children's Stories." *Britain and Japan: Biographical Portraits*. Vol. IX. Ed. by Hugh Cortazzi. Folkestone, Kent: Renaissance Books, 2015. p. 476.
- (3) ダニエーレ・レスタ「ちりめん本『The OGRES of OYEWAMA (『大江山』)』の翻訳：グリフィス訳『Raiko and the Shi-Ten Doji』の影響をめぐって」東アジア比較文化研究 (13) : 2014. 6 p. 157-171。
- (4) アン・ヘリング「国際出版の曙——明治の欧文草双紙」福生市郷土資料室編『特別企画展 ちりめん本と草双紙』福生市教育委員会 p. 36。
- (5) チェンバレン著 高梨健吉訳『日本事物誌 1』(東洋文庫 131) 平凡社 1969 pp. 200-201。
- (6) James, Grace. "Japanese Fairy Tales and Folklore." *Transactions and Proceedings of the Japan Society, London*. 1933. p. 31.
- (7) James, Grace. "The Little Cub" *John and Mary's Japanese Fairy Tales*. London : Frederick Muller, 1957. pp. 83-104.
- (8) アン・ヘリング「国際出版の曙——明治の欧文草双紙」福生市郷土資料室編『特別企画展 ちりめん本と草双紙』福生市教育委員会 p. 32。